

平安期和歌への行平詠の影響―『忠見集』の場合

斎藤 由紀子

一・本稿の目的

須磨にはいとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆるといひけん浦波、夜々はづけに遠く聞えて……

『源氏物語』須磨巻 一一九八頁

には、物語本文がその名を挙げる在原行平の

つゝくにのすまといふ所にはべりけるとき、よみ侍ける

たび人はたもとすずしくなりにけりせきふきこゆるすまのうらかぜ

『続古今和歌集』巻十・羈旅・八七六

が引用されていることは、多くの古注釈が指摘してきた。この歌は、『続古今和歌集』が初出で、しかも『奥入』に「能宣朝臣詠之」とあることから、行平詠であること自体を疑う見方もある(1)。「源氏物語」の記述が、行平詠であることの証明であったのである。

先に挙げた須磨巻の「関吹きこゆるといひけん浦波」という部分には、『前田家本源氏釈』『花鳥余情』『一葉抄』『細流抄』『明星抄』『休閑抄』『岷江入楚』は、『忠見集』の

秋、すまのせきあり

あきかぜのせきふきこゆるたびこにこぞうちそふるすまのうらかなみ

『忠見集』八

も引歌として掲載している。この二首の引歌並列に対して各注釈書は一通りの立場を示す。

関吹こゆるといひけんうらかなみといへるは忠見か歌の心はなはたあひかなえり旅人のたもとすずしくとよめる行平の歌あるによりて忠見かうたをおもひわたりて行平歌といへるにやと邪推くはへ侍り。

『花鳥余情』

花鳥には忠見か秋風の関吹こゆるたひことに声うちそふる須磨の浦波と詠したるを此浦浪と云にかゝりてこれを本として行平とあるをはあやまりたるとしるされ侍る也いか、今案行平は忠見よりは先輩也然共此行平の哥より忠見か哥も出来ぬるとみえたり此段の心は彼行平の中納言の関吹きこゆるといひけむ所の浦浪と云心也まへに心づくしの秋風にとかきてこゝにて浦浪とかける余情たくひなくみえたり

『細流抄』

『花鳥余情』は「浦風」という本文の一致に照らし、行平詠を介して忠見詠の表現を引用したとする。『細流抄』はこれを批判し、忠見の歌自体が行平詠によって詠まれたものであると推測している。

対して、『河海抄』が行平詠のみ掲出しているのは、『河海抄』の準拠を旨とする注釈の一貫した姿勢といえるかもしれない。現代の源氏研究においても準拠や貴種流離譚等の観点から行平詠引用について検討がなされてきた(2)。

『忠見集』の類似歌のほうに、『源氏物語』の引用表現に近いことに着目された袴田光康氏は、村上朝屏風絵の歌として詠まれた忠見詠を「国風」文化規範である村上朝の名所屏風歌の世界を強く想起させるもの」として、行平詠を通して物語に重ねられていることを指摘する。そして平安朝名所絵の流行を背景として成立した『伊勢物語』八七段の「行平」伝承が業平のイメージと共に須磨巻に強く想起させるとしている(3)。

しかし、こうした『源氏物語』論を一旦脇に置き、『忠見集』の側からこの現象を眺めてみると、『細流抄』が指摘するように、前掲の忠見詠にもまた、行平詠の影響が指摘できる。行平詠は『伊勢物語』と共に、『源氏物語』に引用される以前に、平安前期の和歌に影響を与えてきたのではない。

本稿では、『忠見集』の詞書を含む全体の表現から忠見詠の行平詠模倣を裏付け、この貴種流離譚の主人公の表現を採り入れる意図を検討してみたい。

二 行平詠と忠見詠の類似性

行平詠との類似を際立たせている表現は「関吹き越ゆる」「風」である。『忠見集』には、やはり屏風歌としてもう一首

すまのせき

ときせちはすまのせきにもかはらねばみやこにあきのかぜやふくらん

『忠見集』三六〇

が採録されている。この歌にも「関」と「風」が詠み込まれている。

忠見の須磨を詠んだ屏風歌一首は、天曆八年村上天皇名所屏風に詠まれた歌と推測されているが、同じ屏風に詠まれたとされる「須磨」を題材とした屏風歌(4)と比較してみると

須磨

なにはえでもしほのみやくすまの浦にたえぬ思ひを人しるらめや

『信明集』七

すま

もしほやくけふりになれしすまのあまは秋たつきりもわかずやありけむ

『中務集』二七・御所本詞書「すまのせき」

には、こうした組み合わせは見られない。前掲の『忠見集』八番歌の詞書には「秋すまのせきあり」と、屏風の絵には須磨の「関」の秋の情景が描かれていたことが同え、御所本『中務集』の詞書も詞書を「すまのせき」としているが、信明・中務は「関」を詠みこんでいない。信明詠は須磨の情景は「思ひ(火)」を導き出す序詞としての機能し、中務詠は御所本の詞書に「須磨の関」としながらも「関」は詠み込まず、「藻塩焼く煙」という規範的景物に、屏風に描かれていたであろう秋の図柄を踏まえた「秋露」を配する理知的な詠みぶりに徹している。『後拾遺集』時代までの「須磨」を詠み込んだ歌及び須磨で、或いは須磨を題として詠まれた歌三八首を見渡して「関」が用いられている歌は四首のみで、そのうちの一首が前掲行平詠で、二首が前掲忠見詠である。また、浦にはつきもの

で、舟の縁語ともなる「風」は六首に詠み込まれているが、そのうち行平・忠見詠以外の三首は

すまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬ方にたなびきにけり

『古今和歌集』七〇八

を規範として、藻塩焼く煙のなびかせるたり、波をたてたりする脇役として詠まれており、行平・忠見詠のように「風」そのものが感覚に訴えてくることを詠んだものは類例を見ない。

「関吹き越ゆる風」は「須磨」と共に詠まれた「あま(一九例)」「藻塩(二六例)」、「煙(七例)」などと比較して、「須磨」から連想される規範に則った歌ことは表現というよりは、行平・忠見独特の表現性とみてよいだろう。高橋亨氏は「海士の塩焼衣」↓「涙」、「煙」↓「恋ひ・思ひ(六)」の縁語や「懲りずま(二須磨)」の掛詞を媒介として、臘月夜との恋による流離の地として「須磨」が発想されたことを指摘するが(5)、少なくとも『続古今和歌集』所収の行平詠「たび人は…」と忠見詠一首はそうした「須磨」を詠む際の規範的な表現を全く用いてはいないのである。

「関」は都とその外部の「境界」である。「関」を詠み込むのは、都との間の「境界」を意識すればこそである。では、いかなる人が「境界」を意識するのか。行平のいう「たび人」である。後に論ずるが、忠見もまた摂津国に赴いたであろうことが家集の詞書から伺える。摂津の地に実際に赴いた体験が、行平詠の「関吹きこゆる」という表現を取りこませたのではないか。忠見の屏風歌一首は、規範的な景物を配さずに、須磨の地で「風」の音に耳を澄ませ、或いは風の体感から季節の移り変わりを感じ「都」へと思いを馳せるという「たび人」の立場から

詠まれているのである。

「たび人」行平像は、ここと比較している『続古今和歌集』歌以前に、

田むらの御時に事にあたりてつくのすまといふ所にこもり侍りける宮
のうちに侍りける人につかはしける 在原行平朝臣

わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつつわぶとこたへよ

『古今和歌集』雑下・九六〇

において、既に確立していた。この歌は『新撰和歌集』『古今六帖』『麗花集』にも採録され、かなり人口に膾炙していたことが伺える。先に引用した高橋氏もその憂愁の秋の情景のイメージ形成に最も寄与したのが『古今和歌集』所収行平詠「わくらばに…」であるとしておられる。

しかし、詞書の「田村の御時、事にあたりて…」に該当する史実を裏付けることは出来ず、むしろ叙位は順調であったこと、良吏として活躍していたことが指摘されており、『伊勢物語』が彼の不遇と流離イメージを作り上げたとする説が説得的である(6)。そうした現実の行平のありようにそっくり「わくらばに…」の歌も、詞書通り勅勘を被ったのではなく、播磨守赴任時の、送別の宴か、赴任後の都の人々への返歌として詠まれたものではないか、との指摘がある(7)。

つまり、同じ『古今和歌集』雑下に収録された

かひのかみに侍りける時、京へまかりのぼりける人につかはしける

おののさだき

宮こいひがととは山たまみはぬくものにわぶとこたへよ

『古今和歌集』雑下・九二七

と同種の歌であるとみれば、この歌と行平詠の表現の類似にも説明がつく。行平詠「わくらばに……」は特異な人生を歩んだ者の一回的な表現としてではなく、むしろ地方官詠の洗練された定型として『古今和歌集』に収載されたのである。

忠見も『三十六人歌仙伝』に「天徳二年正月卅日任摂津大目」と記されている。他の史料で裏付けすることはできないが、『忠見集』には「津の国」「津の守」に関する詞書を持つ歌が七首ある。『源氏物語』成立より行平に近い時代を、同じ地方官として生きた忠見は、そうした詠歌事情を感じることができたのであろう。そのことは、忠見が行平詠を須磨の関を題材とした屏風歌に取り込んだことと無縁ではないだろう。

三 『忠見集』の摂津詠―「津の国に年頃身を沈めて侍りけるに」

むしろ、歌枕とは、ある土地と事物感情が結びついたイメージパターンであって、そのイメージパターンさえ共有していれば、実際にその地がどのような場所であるか知らずとも詠作に困らない。また、その土地と結びつく対象はその土地の景物であるとは限らず、例えば「暗部山」と「比ぶ」のように、音韻的共通性によるものも多い。特に、屏風歌に詠み込まれる歌枕は、実景に基づいて詠まれることは少なかったと推測される(8)。例えば、小町谷照彦氏は貫之詠における地名がどのように詠まれているかを検証し、典型的景物を詠み込み、縁語・序詞・掛詞等の修辭として歌枕を詠む方法をもって、『古今和歌集』時代の正統性を体現し歌壇を指導したとする(9)。そうした和歌史における前提を鑑みながら、行平と忠見の立場の類似が直ちに同歌枕詠の撰取に繋がったとするのは牽

強付会の誇りを免れない。

しかし、『忠見集』における歌枕詠は、『古今和歌集』の規範に準じているとはいえない面がある。西本願寺本『忠見集』全一九六首のうち、歌枕が詠み込まれている歌は五一首と四分の一強を占めており、実に三種の歌枕を詠みこんでいる。摂津の国の歌枕を詠んだものが一五首と最も多い。内訳としては、屏風や絵に対して詠まれた歌が二九首、羈旅歌二首、恋・その他四首である。特に羈旅歌は地方官らしく、先述の摂津以外にも、美濃・播磨・安芸・筑紫・伊予と多くの地域を訪れて詠み、「勝間田の御湯(二六番歌)」「国府(二七番歌)」「船坂(二八番歌)」「夢前川(二四二番歌)」など、平安期和歌には他に用例があまりない地名が詠まれている。

また、屏風絵における歌枕の詠み方も、例えば、

十月、うちのおじろにをんなくるまものみる

そこふかきしきつのおちにすまずしてあじろによれるひをのみやみむ

『忠見集』四八

では、「宇治」を描いた屏風に対し「敷津」という摂津国の歌枕を詠み込む「敷津」という地名そのものが平安期には他に『実方集』に一例詠まれているに過ぎないというだけでなく、地名同士の組み合わせとしても、全く関連性のない歌枕の取り合わせであって、解釈し難い(一〇)。「すまずして」には「淵が」澄む／「敷津に」住む」が掛かっているとすれば、敷津のある摂津に「住む」のは摂津赴任経験のある忠見自身のことであろうか。「すずして」で上句と対照的に結ばれている下句「ひを(水魚／目を)のみやみむ」は画中の女車の人物について述べている。つまり、摂津で、敷津の深い淵に身を沈めるように追いやられて住

む自らに対して、絵の中の女車の人物が浅瀬の網代に集まる水魚ばかり見て無為の日を過ごしている様を揶揄して詠んだものであろう。屏風歌であるにもかかわらず、「宇治の網代」を詠む際の規範や、一首の独立した屏風歌としての整合性よりも、摂津に落ちぶれて住む自らを詠み込むことが優先されているのである。そうしてみると、平安前期の和歌の傾向はともかく、忠見に関していえば、歌枕の規範的な詠法を洗練するというよりは、自分の知り得た歌枕を積極的に、そして素朴に詠み込み、新奇を銜っていた感がある。とすれば、忠見の歌枕詠に限って言えば、歌枕の規範意識に則って理解を深めるよりも、詞書や歌から彼の体験を掘り下げてみるほうが得る所がありそうである。

先に「敷津」の用例にみえた、忠見の沈淪を歌集中に辿っていくと、忠見自身が摂津に下っていたことについては、次のように述べられている。

つづくににににをみをしめて侍りけるに、おほやけきしめてめし
あげられて……

『忠見集』一六九

京のいとたよりなければつづくにいくとてみちにてわたりけるひとにあ
らつ

みやにはありわびぬればつづくにのすみよしといふかたへこそゆけ
京のひとにいひたりける

つづくにわがためりしすみよしにたよりなみこそまなくたちけれ

『忠見集』一九三・一九四

先に不可解とした四人番歌「底深き敷津の淵に住まずして……」の摂津佐比住まい

の意識と通ずる。しかし、特に左遷されたり蟄居したりする場合でなくとも、こうした不遇意識が詞書や和歌に現れることは決して珍しいことではない。

詠懐

宮まで浪たちくともきかなくにしばしだになど身のしずむらん

『千里集』二二五

同十六年九月廿二日(中略)法皇経一宿て御舟にて、せたにのぼらせたまふ、はしのもとにふねつなぎて介ものどもたてまつる、介かたらひていはく、くりやふねにのりておはんふねにべしてさながらふし、とすなはちこの歌を

いつみにてしづみはてめとおもひしを今日ぞあふみにつかおへらなる

『躬恒集』二六八

このうたをたてまつらするにおほせことのたざる蔵人につかはす
ほどもなきいつみばかりにしづむ身はいかなるつみのふかきなるらん

『順集』二九五

つかさ給はらでちもくの又のひつちのみやふねにつかはして侍りし
としにににに涙やつもついついとさかへは身をしづむらん

『元輔集』六

以上、和歌に詠まれた例を挙げたが、『躬恒集』『順集』には、他に詞書や歌の序にも、こうした表現が散りばめられている。「和泉」という地名が目立つのは、

『沈む』との縁語関係により、『古今和歌集』時代の歌枕詠の傾向と一致する。だが、先に並べた四首には、そうした理論的な修辭における規範意識だけでなく、受領階級に属する者に共通する自意識のようなものが漂っている。

小町谷氏は、本節冒頭で紹介した貫之の規範性を明らかにするために、躬恒の歌枕詠を比較対象とし、躬恒特徴の一つに、晴れの場の和歌においても私的な不遇意識を徹底して訴えかける点を挙げている。先に挙げた『躬恒集』一六八番歌も、屏風歌を献じた功により、法皇の舟に具奉を命じられた場面での献上歌であるし、順や元輔の歌も貴人の目に触れることを前提とした詠である。一見そのような晴れがましい場に『沈む身』を読み込むことは場違いなようでもある。しかし、通常の身分以上に引き立てられたり、或いはこれから引き立てを得ようとするからこそ、殊更に我が身を遜って見せる必要があったとも考えられる。

任地に『身を沈む』不遇意識（もしくは、少なくともそういうポーズをとってみせる謙遜）を、特に献上歌に詠み込み、或いは詞書や歌の序に示すことは、官人詠の一種の様式としてあったようである。忠見の『須磨の関』二首は、こうした晴れの場の和歌において我が身の不遇意識を読み込む際に、一節末尾で述べた地方官の歌の系譜に連なるものとして、行平の「たび人は」の歌を利用したのではないだろうか。

四 須磨の「旅人」―行平の投影

この都を離れて住み住まいする行平像は、『忠見集』以外の私家集中にも現れている。須磨を題とする屏風の中には、浦の自然景に「旅人」の姿が書き込まれているものがある。

〔高遠集〕一七九

「もの思ふとしもなけれど」の「しも」という強調は、かつてその地で浦から吹きつける「関風」に「もの思ふ」住み住まいした「誰か」を念頭に置きつつ、それとは異なる公務の下向の自らを区別するものであり、その上で、自分も波音で眠ることが出来ないと共に感を示す歌である。そして、この「誰か」に「行平」を指すこともできよう。

また、『須磨』詠ではないが、

女院のすみよしまつでさせ給ふるに式部卿の宮の中將のうちのおほんせじにてまゐり給へるにつけて、左の大殿大官の大夫の御もとに、をの宮都人ありやととははつのかにのこふのわたりに佐ぶとこたへよ

〔公任集〕四九〇

も、都人に対し、同じ摂津の地名を挙げて「佐ぶと答へよ」と語句を完全に一致させた行平詠模倣例といえよう。特に『公任集』の例には、前節で考察した、贈答における自己顕彰の色合いが色濃く出ている。

このように、平安期の須磨詠・摂津詠はいくつか、『古今和歌集』九六二番歌「藻塩垂れつつ佐ぶ」に詠まれた行平の影が指摘できるものがある。行平影響歌としてひとくくりにしてしまえば、忠見の須磨の関を詠んだ屏風歌二首も、これらの早い例として、まずは位置づけることができる。

しかし、行平影響歌に現れるのはあくまでも『古今和歌集』所載歌の「都を離れた住み住まい」という着想のみが鍵語となっており、「二節で述べたように『続

なん殿にたびびとやすめり、ふちの花さけり、すまのうらまきに滝落ちたり滝の上にかかるふちなみみるとやむかしのひとのいへるせりけむ

〔能宣集〕四六六

なつすまのうらにたび人ゆく

まちどほに宮この人は思ふらむすまのはまへはすみうかりけり

〔忠慶集〕五〇

能宣詠の須磨に「家居（一）したという「昔の人」は画中の人物を指すと共に、須磨で蟄居していたとされる行平の『古今和歌集』歌「わくらばに」を念頭に置いたものと指摘されている（一三）。

忠慶詠は、屏風に書き込まれた「たび人」の立場で、先に挙げた『古今和歌集』の行平詠の「佐ぶ」心情をより明確に打ち出している。「とふ人あらば」と行平が仮想したように、自分を待つている都人に思いを馳せ、須磨の地を「住み愛し」とする詠には、「藻塩垂れつつ佐ぶ」と詠んだ行平が意識されているはずである（一三）。

これらは、慶賀を旨とすべき屏風歌であっても、蟄居の憂愁を詠んだ行平詠を念頭として詠まれた例である。行平が現実の官人としての像から、貴種流離譚の登場人物として捉えなおされていく過程がここにあるのではないだろうか。

また、地方に向かう官人によって須磨の地で詠まれた歌においても、行平の住み住まいを念頭に思いとられるものがある。

つぐにのすまのむまやにて

うらかぜにもの思ふとしもなけれども波のよるにぞ寝られざりけり

古今和歌集』八七六番歌の「関吹き越ゆる風」の引用は見られない。忠見の屏風歌が、単に『古今和歌集』所載の行平詠が示した「たび人」詠の規範としての行平詠に留まらず、それほど増強していたとは思われない『続古今和歌集』の「たび人に」の歌を引用しているということは、忠見が特に「行平」その人の詠に強い関心をもっていたということではないか。そのことを証するためには、貴種流離譚の主人公としての「行平」のイメージを作り上げていったとされる『伊勢物語』東下り章段の影響を『忠見集』中に見ていかなければならない。

五 『忠見集』一九三・一九四番歌の『伊勢物語』類似表現

三節では、『忠見集』一六九番歌の「津の国に身を沈めて侍りける」と一九三・一九四番歌「京のいとたよりなればつぐににいくとて」はどちらも摂津在住時代を指すものとして一旦は同列に論じた。しかし、一九三・一九四番歌は詞書の書き様、歌集中における配置等から、地方官としての移住とは別の時期に詠まれたもの、少なくとも西本願寺本においては別種の扱いをうけていることが指摘できる。

歌仙歌集本では両方二三五番～一五〇番にまとまっている羈旅歌群中に一九三・一九四番歌→（伊予での贈答歌）首→一六九番歌の順に載せられており、こちらは、蟄居から京へ召し出しという一連のストーリーをなしているように読めるよう、詞書にも一六九番歌に「津の国にとしる身をしづめてこもりゐたるを」とことばが足されている。この時期について、秋間康夫氏は、『忠見集』中に名前のある人物を検証した結果、官仕え以前の全てを摂津で過したわけではなく、天曆五年前後の数年ではないかと推測している（一四）。

西本願寺本『忠見集』の配列上、一六九番歌は、騷旅歌が比較的まとまつてい
る部分(二二二～一七〇番歌。但し一六八番は除く。)の末尾に置かれ、一九三・
一九四番歌は、その騷旅歌群とは別に、再度、末尾に近い部分におかれている。
この歌は『拾遺和歌集』にも採られているので、比較のため並記してみる。

京のいとたよりなければつづくにいくとてみちにてわたりけるひとにあ
ひつ

みやこにはありわびぬればつづくにのすみよしといふかたへこそゆけ
京のひとにいひたりける

つづくにわがたのめりしすみよしにたよりなみこそまなくたらけれ

『忠見集』一九三・一九四

つづくにまかれりけるに、しりたる人にあひ侍りて

宮にはすみわびはてつづくにの住吉とききよきにこそゆけ

『拾遺和歌集』雑下・五三九

『拾遺和歌集』の詞書からは削られているが、『忠見集』の詞書には「京のい
とたよりなければ」と、摂津へ移住する理由が述べられている。一六九番歌の「津
の国に身をすめて侍りけるに」が、不本意ながら、京を離れて任地である摂津
に住まった体験を述べているのに対し、一九三番歌では逆に「京」における境遇
に憤懣があつて、自ら津の国に行くという事情を述べているのである。

この都における寄る辺なさを原因として他の土地へ向かう、という言葉辞は「む
かし、男ありけり。京やすみ憂かりけむ。：(八段)」「むかし、男ありけり。そ
の男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまの方にすむべき国

もとめにとてゆきけり(九段)」「むかし、男、京をいかが思ひけむ。：(五七段)」
など『伊勢物語』のいくつもの章段の冒頭に見いだせる。

決定的なのが、歌用いられた「ありわび」である。「ありわび」は和歌・散文
問わず平安期を通してそう頻繁には用いられない語である(15)。用例が少な
いからこそ、読み手には否応なしに

むかし、男ありけり。京にありわびてあづまにいけるに。：

『伊勢物語』七段―一一九頁

が想起される。

また、『伊勢物語』九段に關していえば、その途上で「知り合ひの修験者(『
渡りける人』)に出会い、京(『京のひとにいひたりける』)という流れが、
詞書にそのまま取り込まれているのである。

このように私家集の詞書及び和歌に、『伊勢物語』の章段ごと取り込む手法は、
『為頼集』においてもいくつかが指摘がある(16)。西本願寺本『忠見集』は、
この『伊勢物語』東下り章段の引用を、あえて騷旅歌に含めずに、集末尾に置く
ことで集全体を意味づけようとしているのではないか。

この都から追われる感覚は、一九三・一九四番歌に共通して詠み込まれている
「住吉」の詠み方にも、表れている。「住吉・住の江」は西本願寺本『忠見集』
中に六首と最も多く詠みこまれている歌枕である。住吉詠は主に「松」「忘れ草」
などの規範的景物によるものが大多数であり、不遇意識を詠む場合にも景物の
「松」に老いの身や六位の緑袴を重ねて詠むことが多いが(17)、『忠見集』一
九三・一九四番歌の場合にはそれとは異なる。

『万葉集』において「住吉」には全て「すみのえ」の訓が付されている。平安

期以降、住の江は歌字書では「江」として分類されるようになるが、しかし、片
桐洋一氏が指摘するように、住吉であつても波等の「江」の景物を詠み込む例は

多数あり、表作において厳密に詠み分けられていたとは言い難い(18)。「すみ
よし」という音でないと成立しない歌の嚆矢として挙げられるのが忠見の父、壬
生忠岑の

あひしりてはべりける人のすみよしにまつとききて

すみよしとあまはいふともながあすな人わすれぐさきしにおふてふ

『忠見集』二六一

である。この「住吉」に「住み好し」を掛ける詠法は、忠岑の子である忠見の一
九三・一九四番歌にも用いられている。後藤祥子氏は「住吉」詠が、十世紀初頭
には住吉現地と何らかの関わりをもつて詠まれた歌がほとんどないことを指摘
した上で、住吉の地にて稀な例として忠岑の歌と、忠見のこの二首を挙げている
(19)。「住吉」という地名に「住む」という感覚を持ち得たからこそその發想と
見るべきであらうか。

もちろん、忠見に限らずこの掛詞は他例を多数見いだすことはできる。しかし、
これらには共通した忠見詠との相違点がある。それは、「住吉」に「住み好し」
を掛けつつも、決して一首の歌意としては、「住吉」が「住み好き土地である
と頼んでいない」という点である。以下に、「住吉／住み好し」の掛詞が用いられ
ている用例を挙げた。

世の中を住吉としもおもはめにまつことなしにわがみへましや
かへし

すみよしとおもはすがらへにければまつもかひなきにこそすれ

(敦忠集七・七三／七二番歌拾遺集・四六二・題知らず・よみ人しらすなにを
まつとてわが身へぬらん)
つのかみさだひらの朝臣きのくににくるに、中宮ぬきたまふあしでに
みやこいでてなにはのかたへゆく人はすみよしとききつらにたまふな
(『忠見集』一三三)
よのなかをいとふなにそのほととや)
のがるれどおなじなにはのかたなればいづれもなにかすみよしのさと
(清少納言集)一三・二四

すみよしにて

みやこをばなほすみよしとおもひついのりてぞゆく神のこころを

『高遠集』二三五

つづくにあるところ、うちの御つかひにただたかを

九月ばかりさかひといふ所にしほゆあみにおはしたりけるに、ひめぎみの御
もとに

すみよしのながあうらもわすられてみやこへののみいそがるかな

返し

立ちかへりひごろのふればすみよしの猶ながあするつらにこそ見れ

『定頼集』四〇・四二

同じ月廿五日、住吉の御多うせたりとききて、馬

すみよしのみむろの山のうせたらばうき世中のなをさめもあらじ

返し

すみよしのなまかひなくてうきことをみむるの山に思ひこされ

『大倉院前御集下』二三八・三三九

いずれの歌も、傍線部を付した打ち消しや反語などによって「住み好し」が否定されている。加えて、「重傍線」を付したように、「住吉」と対比して、むしろ「都」を慕う歌も見受けられる。平安貴族にとつてはそれが当然の感覚であつただろう。『忠見集』でも、他人に対して贈る歌では、同様の詠みぶりとなつている。遠い土地に赴く人への餞の歌としては、いくら住吉が住み好いといつてもそこに長居せず早く都に戻つて欲しいと詠み、答える側も、贈答相手の待つ都の方が「住吉よりも住み好い」と詠むのが礼儀というものである。

しかし、『忠見集』一九三番歌は、そうした儀礼的な発想に逆行するように「住吉を「住み好し」の地と頼んでいる。西本願寺本『忠見集』が、これを儀礼的驛旅歌群から分けて集末に置いたのは、この異質さからではなかつただろうか。

一九三番歌は、遠地に赴く者としての、それを送り出し帰りを待つ者への儀礼を逸脱し、都という空間に生きるすがすがしさを失った者の厭世観が前面に押し出されている。そして、摂津から都に送つた一九四番歌は、「藻塩垂れつつ佐ぶ」と詠んだ行平や、東下りの旅に出た業平がそうであつたように、「住み好し」の地と頼んでやつてきた土地においても尚「頼りなみ」というしかない現実と直面しての詠となつている。忠見は皇族の血をひく行平・業平のような「貴種」とは到底いえない下級官人であるが、少なくとも西本願寺本に受け継がれる系統の『忠見集』編纂者は、自らの生きる場を模索しなければならぬという厭世観を、貴種流離譚の主人公達と忠見の共通項として捉えていたのではないだろうか。

六、結論

『忠見集』八・三六番歌屏風詠は、行平詠の影響を受けて詠まれたものと見てよいだろう。それは下級地方官の儀礼的沈淪詠ともいうべき歌の系譜に連なるものである。ただ、この二首の屏風詠は、当時人口に膾炙したであろう『古今和歌集』所載の行平詠「わくらばに……」ではなく、『続古今和歌集』が採りあげるまで注目されていなかった「たび人は……」を享受しているという点で、行平詠への並々ならぬ興味関心が伺える。このことは、『忠見集』一九三・一九四番歌における『伊勢物語』東下り章段の引用が裏付けている。

こうした『忠見集』に現れた行平詠・『伊勢物語』東下り章段の影響は、貴種ならぬ忠見が、過去の流離する貴種の表現によって美化しようとする試みの跡ではないだろうか。中でも、西本願寺本『忠見集』は、詞書及び歌詞に『伊勢物語』東下り章段の表現と、都からの脱却の希求を散りばめた「住吉」詠を配置し、歌集の締めくくりとしようとする編纂意図が伺える。

平安期には、『古今和歌集』において確立された規範的歌とはと世界観によつて詠まれる和歌史とは重なりつつもずれる傍流として、下級官人による不遇詠があつた。それらの和歌および歌集は、『源氏物語』とは違つた形ではあるが、行平詠や『伊勢物語』を享受し独自の作品世界を作り上げており、その一例を『忠見集』にみることが出来る。『源氏物語』は一世の源氏たる「光る君」という貴種中の貴種の王権譚でもあろうが、その書き手は、地方官詠の世界観から決して断絶してはいなかったはずである。『源氏物語』の引歌もまた、平安前期和歌史の潮流の中で捉えなおすことで、その獨創性を際立たせることができるはずである。

注

- (1) 妹尾好信「閑吹きこゆる……」は行平歌か——『源氏物語』須磨の巻・謡曲「松風」引歌真偽考『鎌倉室町文学論叢』二〇〇二・五
- (2) 阿部秋生『源氏物語研究序説』東京大学出版会 一九五九・四 等
- (3) 袴田光康『源氏物語』の須磨『源氏物語の礎』青簡社 二〇二二・三
- (4) 田島智子『屏風歌の研究 資料編』和泉書院 二〇〇七
- (5) 高橋亨「喩としての地名」『源氏物語 地名と方法』桜楓社 一九九〇・一〇
- (6) 目崎徳衛『平安文化史論』桜楓社 一九六八 田中まき「在原行平の史実と伊勢物語」『伊勢物語 虚構の成立』二〇〇八・二二
- (7) 岩下均「在原行平と須磨」『目白学園国語国文』一九九五・三
- (8) 福岡温子「屏風歌と歌枕」『時代別日本文学史事典中古編 有精堂』一九九五・一
- (9) 小町谷照彦「古今和歌集の歌ことば表現」岩波書店 一九九四・一〇
- (10) 異本系統書院部本『実方集』に「うぢどのに、殿上人もゆきて、ふねにのりて、しきつといふ所に舟とめてありけるに……(一五)」とあることから、宇治から乗船して敷津で泊るという行程があり得たということはわかるが、それにしても、宇治の網代の図柄に対して詠みこんで了解を得られるほどに定着した歌枕とはいえない。
- (11) 『奥入』は「閑吹き越ゆる……」の歌の作者を能宣としている。『源氏物語』の行平の名が現れる箇所には「おはすべき所は、行平の中納言の藻塩たれつつわびける家」近きわたりなりけり。(一七八七頁)とあり、あるいは、この箇所への引歌として、この歌を想起して誤つた、というのは強引であろうか。しかし、管見の範囲にこの能宣詠を引歌として挙げる注釈は見当たらない。
- (12) 増田繁夫『能宣集注釈』私家集注釈叢刊七 貴重本刊行会 一九九六・

一〇

- (13) 『惠慶集注釈』(私家集注釈叢書)は、惠慶詠五句に「過ぎ憂かりけり」という異文があり、都で待ちわびる人への思いと、須磨の景勝への去りがたさに揺れる思いを詠んだものとする解釈を提示している。が、行平詠を介在させることによつて「住み愛し」とする本文が違和感なく享受できることに注目しておきたい。
- (14) 秋間康夫「壬生忠見とその家集」『日本文学人文科学研究紀要』一九七六・三
- (15) 管見の範囲内では、『公任集』『道命阿闍梨集』『相模集』『古活字本狭衣物語』『夜の寝さめ』『浜松中納言物語』に一例ずつ。
- (16) 川村裕子「藤原為頼について」『立教大学日本文学』一九八二・一二 田坂憲二「為頼集」の構造とその歌風『為頼集全釈』私家集全釈叢書十四 風間書房 一九九四
- (17) 保坂都「津守家の歌人群」第一章三節「住吉と和歌」四節「住吉と歌人——人生的素材の形象化」武蔵野書院 一九八四・二二
- (18) 片桐洋一「歌枕歌ことば辞典増訂版」等閑書店 一九九九
- (19) 後藤祥子「源氏物語の史的空間」第二章三節「住吉社頭の霜」東京大学出版会 一九八六・二

引用した物語作中歌以外の和歌は全て、『新編国歌大観』により、(一)内に歌集名と歌番号を付した。『源氏物語』『伊勢物語』の引用は『小学館新編日本古典文学全集』により、(一)内に巻名と頁を記した。『花鳥余情』『細流抄』の引用は『源氏物語古注集成』によつた。